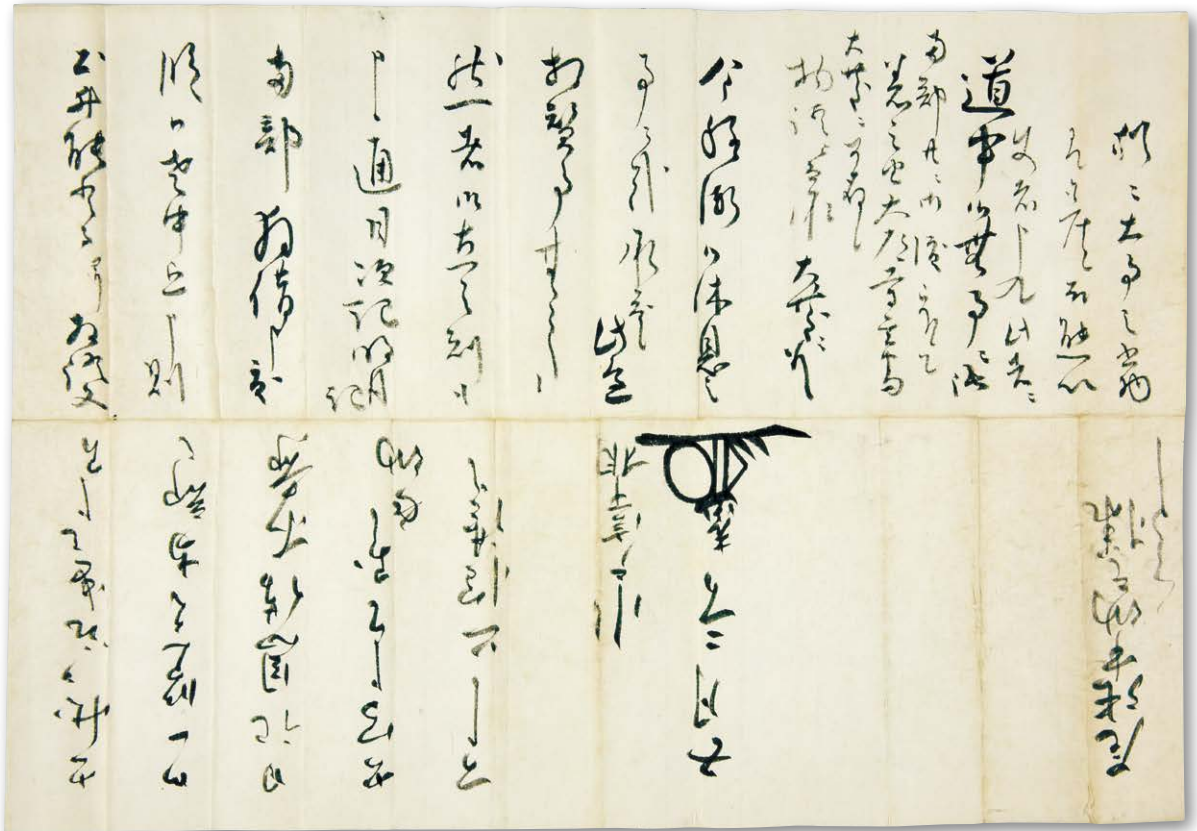


蓬 左

HÔSA



徳川光国書状

権力と本

—蓬左文庫本『日次記』の書写に伝来をめぐって—

本の価値

かつて、本は今よりもずっと大きな価値や意味を持っていた。現代日本社会には本があふれており、私たちの周りには読み切れないほどたくさん本がある。それを、私たちは書店やインターネットで購入し、あるいは図書館等で借りて読むことができる。本は身近なものだ。

けれど、かつては本は稀少なものだった。印刷の技術が導入される以前、本は手で書き写すしかなかった。書写という行為は手間暇のかかる営みであり、多くの時間と料紙・墨、あるいは人手を必要とした。また、書写の前提として、元になる本を写させてくれる人、貸してくれる人を求めなければならぬが、それは簡単なことではなかった。そこには、依頼・被依頼の関係、さらに承諾・不承諾の関係が発生する。めつたに見ることのできない貴重な本を書写させてもらうとなると、その特別性はより増大する。

本に書かれていることは、それを求める人にとって必要な、あるいは重要な知だった。ある特定の本にしか書かれていないことは、当然のことながら、その本を見なければ手に入れることができない。いや、そんな特別な知でなくて

も、本をたくさん読むことができれば、多くの分量の知を獲得することができる。それは先人たちが蓄積してきた知の結晶だ。中国や日本の本を数多く所蔵することは、和漢の知の体系にアクセスする回路を手に入れることであり、知を所有することだった。

権力と本

世を治める立場の人たちは本を必要とした。それらの中には統治の考え方やそのための技術が書かれているものがある。歴史や思想を学ぶことは統治にとって大変重要なことだった。また、法や制度、先例は、本を見なければ知ることができない。さらに、政治と不可分のものとされてきた儀式行事の作法は、口伝もあろうが、本を見なければ知ることができないことが少なくなかった。だから、朝廷の貴族たちにとって本は大切なものであり、権力の確保、維持、運営にとつての必需品だった。

仏教の僧尼たちも本を求めた。シャカのお教が書かれた「経」、仏教教団のルールたる戒律が記された「律」、学僧が記した教学書の「論」、さらには仏教の信仰や流通の姿が描かれた仏教説話集の類など、彼らは多数の仏典、仏書を学んだ。日本未請求のものや最新のものについては、海を渡って入手し、日本に持ち帰った。神祇祭祀に携わる家も本を大切に持った。特に、神話や

祭祀について記す本は自らの職務に直接関わった。また、学者を輩出するような学問の家が本を重んじたのは言うまでもない。彼らは中下級貴族の家を構成しており、世襲的に家の職務をはたし、所蔵する本を子孫たちに相続させていった。

武家はどうか。弓馬の道にいそしみ、戦闘を職務とする武士たちも、やがて本を大切にすることがようになった。大隅和雄氏によると、武家は自分たちの独自の文化を創ることができず、もっぱら公家文化の受容、模倣によって自分たちの文化を形成していったという「大隅和雄他『日本思想史の可能性』平凡社、二〇一九年」。武家も、だから公家社会で重んじられた本を求め、そこから多くのことを学んだ。

世を治めた朝廷の公家たちも、また幕府の武家たちも本の価値を知り、家々で本を収集した。だが、それだけではない。自らも本を創り出し、それによって権力をさらに強固にしたり、拡張したりしようとした。歴史や思想を語る本、法や制度を集成した本、政務・儀式・行事に関わる作法や故実を記述した本など、書物は学ぶものであると同時に、作り、発信するものであり、そのこと自体が政治行為の一つだった。本は各時代に創出され、継承、発展され、重層されていたが、それらはしばしば権力と密接な関係を持っていった。

『日次記』の書写と伝来

貴族や武士の家に集積された書物群は、その家の重要な財産だった。だから、代替わりの時などに、誰がどのように本を相続するのかが小さくない問題だった。蓬左文庫は、尾張徳川家初代の徳川義直（一六〇〇～一六五〇）の蔵書を中心に、その後尾張徳川家が収集した書物を加えて今日に伝えられた書物群である。義直の蔵書の中でとりわけ貴重なものが、父の徳川家康（一五四二～一六一六）から継承した「駿河御譲本」と呼ばれる書物群である。

私たちは、現在、蓬左文庫所蔵の典籍のうち、古代に関わるものを中心に共同の調査、研究を進めている『蓬左』九五、九六参照。その中で『日次記』と呼ばれる本に出あうことができた。これは平安鎌倉時代の貴族たちの日記類を収集したもので、全二三〇冊（うち一〇冊は目録）。甲戌癸の十干で分類、配列しており、木の箱に収められる美本である。

『日次記』は二条家が編集した本である。二条家は京都の代表的な公家で五摂家の一つ。鎌倉時代初期の藤原（二条）良実（一一二一～一二七〇）にはじまる。この家は、貴族の日記や諸行事の記録類の収集に熱心だった。それらには、朝廷の政務、儀式、行事などの詳細な執行記録が記されており、貴族たちが職務を果たす

上で有益な知が多々記述されている。二条家は、それらを集積することを、家の継続、発展、つまり権力の保持、継承の柱の一つとした。

『日次記』は、著名な二条良基（一三二〇～一三八八）の編だと説かれることがある。良基が『日次記』の編纂に大きく関わったことはまがいなかるうが、しかし彼一人の編とはできないように思われる。本の集積は良基以前からなされ、また良基以後にも種々の追加がなされたと考えられ、二条家代々の編纂と見る方が実態にあっているように思われる。

徳川家康は、大変熱心に本を集めた。家康が集めた多数の本は、慶長七年（一六〇二）、江戸城内に富士見亭文庫が設置されてそこに収められ、のちに紅葉山文庫が設置されてそこに移された。また、將軍職を秀忠に譲って駿府に移つてからは、駿府城内に駿河文庫が設置されてそこにも多数の本が集積された。

戦国の世を生き抜いた二条家は、この時代の当主であった二条昭実（一五五六～一六一九）が家康との親交を深めていた。それは新時代に適応して、朝廷や二条家の力を保持したいとする政治戦略によるものだったと思われる。昭実の養子の二条康道（一六〇七～一六六六、実父は九条幸家）は、慶長一八年、家康から「康」の一字を拝領し、これ以後、二条家代々は將軍から一字を拝領する慣例が生まれ

た。翌慶長一十九年、家康はついに二条家の『日次記』の入手に成功する。同年一月より、翌年三月にかけて、二条家本を元にして『日次記』の書写が行なわれ、それが家康の蔵書に加えられていった。

蓬左文庫の『日次記』

蓬左文庫が所蔵する『日次記』は、しかし、義直が父家康から譲られた本ではない。当初、尾張徳川家は『日次記』を所持していなかった。のちになって、家康の本を書写させてもらって蔵書に加えたものが、現在、蓬左文庫に所蔵される『日次記』である。その書写年は寛永十年（一六三三）のことであった。やがて水戸徳川家、紀伊徳川家も『日次記』を所持するところとなり、徳川將軍家と御三家にこの本が伝えられることになった。公家文化の知の体系が記された『日次記』は、こうして代表的な武士の家にも伝えられることになった。この間、二条家は何回かの火災にあつて、蔵を焼いている。また、紅葉山文庫の『日次記』は、明治になってから火災で焼失した。だから、蓬左文庫本『日次記』は現存する貴重な写本となっている。私たちの共同研究の成果の詳細は、まもなく論文として発表する予定である。

（名古屋市立大学教授 吉田一彦）

展示室1・2 徳川美術館本館

夏季特別展

合戦図 —もののふたちの勇姿を描く—

合戦図の発展を辿る展覧会

歴史の中で繰り返されてきた戦を描く合戦図は、近年、特に戦国時代の戦を描いた合戦図を中心に関心が高まっており、書籍も多く出版されています。

織田信長・豊臣秀吉・徳川家康の三英傑が登場し、桶狭間や長久手、関ヶ原など多くの古戦場があるこの東海地方にも「長篠合戦図屏風」(名古屋博物館蔵)や「賤ヶ岳合戦図屏風」(岐阜市歴史博物館蔵)をはじめとする戦国合戦図が伝わっています。

七月二七日から始まる特別展「合戦図—もののふたちの勇姿を描く—」では、現存する合戦図の嚆矢として国宝「平治物語絵巻」や重要文化財「後三年合戦絵巻」(共に東京国立博物館蔵)などの中世絵巻から合戦図の歴史を辿り、戦国合戦図の誕生と展開を探っていきます。

大坂冬の陣図屏風とは

昨年夏の特別展「英雄たちの戦国合戦」で、凸版印刷株式会社による「大坂冬の陣図屏風 模本」(東京国立博物館蔵)のデジタル想定復元製作の途中経過を映像展示しました。本展では完成した復元屏風を初公開します。

この「大坂冬の陣図屏風 模本」は江戸時代後期の模本で、原本は見つかっておらず、製作者や時代、注文主も定かではありません。本稿では、この模本を紹介しつつ、その製作背景について一つの仮説を立ててみましょう。

「大坂冬の陣図屏風 模本」の特徴は、画面の凡そ半分が豊臣秀頼の籠の大坂城で占められ、戦闘場面は、真田丸の攻防、塙団右衛門の夜襲と、豊臣方の活躍のみが描かれていることです。このことからこの模本は豊臣家ゆかりの人物が描かせた可能性が考えられます。

ところが、この模本は徳川幕府御用絵師の狩野家に伝わり、原本の下絵と思われる作例も幕府に蔵されていたことが明らかになりました。つまり、徳川家発注の可能性も考えられるのです。

逆転の表現

では、勝者の徳川家が敗者の大坂城を中心に描く合戦図を発注することがあり得るのでしょうか。合戦図の歴史をみると敗者を画面に大きく描くという構図は珍しくありません。とりわけ興味深いのは、多くの類例が残る一の谷合戦図です。「一の谷・屋島・壇の浦合戦図屏風」(個人蔵)もその一



大坂冬の陣図屏風 模本 右隻 江戸時代 19世紀 (東京国立博物館蔵) 展示期間：7月27日～8月25日



一の谷・屋島・壇の浦合戦図屏風 右隻 江戸時代 17世紀 (個人蔵)
 展示期間：右隻7月27日～8月18日 左隻8月20日～9月8日

例で、今まさに敗走する平家の館が中央に描かれています。この図では館は小さく描かれています。同種の作品では画面の半分以上に平家の館が描かれる作例もあります。

平家の館が如何に巨大であろうとも、平家の多くは無惨に戦死する姿や敗走する姿で描かれ、源氏はその美談や活躍が画中に散りばめられており、源氏に焦点が当てられています。つまり、勝者への視点で描かれていても敗者の拠点を画面中心に置く合戦図はあるのです。

■図様の継承

ただし、源平合戦図は物語絵であり、特定の人物や家の武功を讃える戦国合戦図とはそもそも主題は異なりますが、絵画の場合、主題を越えて既にある図様や構図を引用するというのが行われています。例えば、家康の生涯を顕彰する重要文化財「東照社縁起絵巻」(日光東照宮蔵)は軍記物語の「後三年合戦絵巻」から図様を引用しています。

平家の館をのみ込むように迫る源氏軍という、合戦図中最も多く類例が残る一の谷合戦図の型に、豊臣の大坂城と徳川軍を重ね合わせた視点の戦図合戦図が作られていたとしても不思議ではありません。

本展覧会では約五十点の合戦を描く図を、前后期で入れ替えながら展示いたします。それぞれの合戦が描かれた背景を想像しながらお楽しみ下さい。

(徳川美術館学芸員 薄田大輔)



大坂冬の陣図屏風 模本 左隻 (東京国立博物館蔵)

Image:TNM Image Archives

『青窓紀聞』の世界

各種情報が満載

文政二年（一八一九）六月十二日、名古屋やその周辺で一七〇年ぶりに大きな地震が起きた。市内各地の寺院や民家の塀が倒れ、瓦が落ち、また地割れから泥が噴出した。死者は四〇数人に及んだという。地震には噂が付きもので、七寺の塔はくるくる回り、地震前後にシラサギが空を舞い、小田井村では地震で井戸が濁ったため、井戸浚えをしたところ、大きなアワビが浮き出して、表面に南無阿弥陀仏の名号と蓮如の文字が記してあったという。いずれも荒唐無稽ともいえる話だが、不安な人びとの心を映し出したものだろう。しかも、熱田宮では揺れを感じず、また名古屋の町からは日待ちをし、秋葉山への代参が立てられたということも記事にはある。地震除けや安全祈願の信仰が見られたのである。

この話は、三月に蓬左文庫が刊行した『青窓紀聞 卷二〜五』に載っている。卷二〜五は文化十一年（一八一四）から文政六年（一八二二）の出来事を記録しているが、ここには実にさまざまな出来事が収集され、書き留められている。地震、天候、祭礼、信仰、見世物・開帳、物価の動き、刃傷事件、尾張藩士の批評など、記録者の水野正信の関心は幅広い。しかも『青窓紀聞』は



文政2年6月12日条 大地震

慶応四年（一八六八）年まで書きつづけられた、全二〇四冊にもなる記録である。これを読むことで、十九世紀前期、江戸時代が終焉を迎えていく揺れ動く時代の世相や政治・外交の動きを、十二分にうかがい知ることができる。

人心に対処する為政者

幕末社会で起きた出来事を噂や風刺を交えながら、水野は記録した。もちろんそれらの記事すべてが事実であるとは言えない。荒唐無稽な話も当然ながら含まれている。

しかし、地震の話もそうだが、荒唐無稽な噂話の中には当時の人びとの心の内が映し出されている。一五〇年後に生きる私たちが、それを読みとめることはなかなか難しい。だが、人びとの心の内面がどのようなもので、どのように変化しつつあるのか、それを知り、それに配慮することが必要だという認識が、為政者や儒学者にはあった。「人心」や「民心」という言葉が、為政者

や儒学者の書いた文章には、たびたび出てくる。祭礼や信仰、見世物やいろいろな興行に熱中し、心を奪われていく流行に、危惧を抱いたのであろう。

そうした「人心」の動き、それを危惧し、対応しようとした為政者の問題意識を理解することは、幕末社会を知るためには欠かせない。『青窓紀聞』はなによりも半世紀にも及ぶ記録である。時間の幅を広く取ること、とらえ難い「人心」の変化とそれへの対応という問題を考えることができるのは、この風聞書が持っている意義のひとつであることは間違いない。

人々の営みを書き留める

地震とは別に、今回刊行された『青窓紀聞』からもう一つの記事を紹介しておきたい。文政五年（一八二二）三月頃の記事だが、堀川の桜の花見の話がある。堀川端の桜を見る武士や町人、茶店を描いた挿し絵が添えられている。記事にはこう書かれている。「堀川の花、追々よくなり、今年など誠二大賑合。水茶屋、料理茶屋、菓子屋軒をならへたり」。この他、すし屋、大和菓子屋がびっしりと立ち並んでいたという。堀川桜の花見の賑わいが、この時期に始まるうとしていた。『青窓紀聞』と同じ頃、尾張藩関係者が編集した『尾張名所図会』にも庄内川の花見の光景が挿し絵とともに紹介されている。春日井郡下

小田井村と枇杷島村の堤上や枇杷島橋の中島が花見の名所となり、多くの人が遊覧に訪れるようになった有様が記述されている(後編巻之三)。庄内川の両岸の桜樹は弘化二年(一八四五)の春に数千株を植えてから、幕末になって花盛りを迎えたという。名所を遊覧し、桜を愛でることが定着しようとしたことも、「人心」の変化を表わしているのだろう。



文政5年3月条 堀川の桜

情報の集積地 名古屋

嘉永六年(一八五三)以降、外交問題によって幕末社会はいっそう混迷を深めていくことになった。その後に起きた政治的事件、それにかか

わった藩や志士たち、そして人びとの動きはより活発となり、「処士横議」の時代、「世直し」の時代が始まった。そこで生まれたさまざまな情報は、「風説」「風聞」として書き写され、流布し、集積されていった。そして全国の多くの人が共有するものとなった。本格的な「風説(聞)書」の時代が幕を開けたのである。名古屋でも『青窓紀聞』のほかに、小寺玉晃が文久二年(一八六二)～慶応三年(一八六七)の間に書き留めた風聞集(『東西評林』、『東西紀聞』など)もある。

水野や小寺の風聞書には、文久年間になると「新聞」「新聞紙」という言葉が散見されるようになる。また慶応年間には、『日本貿易新聞』、『海外新聞』、『中外新聞』、『万国新聞』などの新聞紙が丹念に書き写されている。これらの新聞は海外で発行された外字新聞を翻訳したもので、多くの海外情報が掲載されていた。こうした外国新聞の翻訳作業は幕府の洋書調所の蘭学者が担当したが、その一人に名古屋生まれの柳川春三がいた。博物学者伊藤圭介に蘭学や砲術を学んだ人で、「新聞雑誌の創始者」と評価される人物である(尾佐竹猛)。

この時代、特に人びとが求めたのは外国情報であった。それに応えようとした仕事は「新聞」の発行であった。名古屋にも生まれた「風聞書」の世界は、同じ名古屋で生まれた新しい知識人を通して、「新聞雑誌」の時代へとたしかに連な

っている。名古屋という地は両者が重なりあう場所であり、それを担う人々が生まれ、また多様な情報を収集、書写した場所である。幕末の名古屋は情報文化の進化と展開という点で、大きな歴史的役割を果たしたと言える。

(名古屋大学名誉教授 羽賀祥二)

なお、『青窓紀聞』について知りたい方は、木村慎平「水野正信と『青窓紀聞』—幕末名古屋のソーシャル・ネットワーク—」(名古屋と明治維新)風媒社、二〇一八年)をお読みいただきたい。また、「風聞書」の時代の意義に関しては、宮地正人「風説留から見た幕末社会の特質」(『幕末維新期の社会的政治史研究』岩波書店、一九九九年)、幕末の海外情報の収集については、岩下哲典「幕末日本の情報活動—『開国』の情報史—」(雄山閣出版、二〇〇〇年)を参照されたい。



名古屋叢書四編1「青窓紀聞 巻二(巻五)」
文化11年(文政6年)1814(1823)

1冊 2千円 A4版 一六〇頁

徳川光国書状

水戸徳川家二代当主の徳川光国(光圀)が、尾張徳川家二代当主の光友(光義)にあてた書状である。この書状は「明月記」に付属して蓬左文庫に伝来している。

光国といえば、時代劇で諸国を漫遊する「水戸黄門」として著名だが、この書状では「水戸宰相」を名乗っている。「黄門」と「宰相」はいずれも朝廷の官職の中国風の呼び名で、それぞれ中納言と参議を意味する。つまりこの書状は光国が参議在職中(寛文二年〜元禄三年「一六六二〜九〇」)に記したものである。

この書状で光国は、光友が所持する「明月記」「日次記」を貸してほしいと願っている。「明月記」は鎌倉時代の公家藤原定家の日記であり、「日次記」は二条家がまとめた公家日記の集成である。光国は寛文十二年に彰考館を設けて『大日本史』の編纂を始めたが、それ以前から歴史編纂を進めていた。これらの公家日記を所望したのも、そうした歴史編纂の材料を求めてのことであった可能性が高い。

さらに後段には、光友からこれらの書を借りる旨を老中に申達し、証文として土井利房(若年寄)の書状を同封した

旨が記されている。この土井利房書状も、光国書状とともに「明月記」に付属している。そこには、「御書物蔵」(幕府の書物蔵)にある「明月記」「日次記」を、先年「尾張様」が書写して所持しており、光国がそれを書写したい旨を老中に申達して認められた旨が記されている。

ここで一つの疑問が生じる。幕府書物蔵に尾張家本の原本があるのに、なぜ光国は転写本である尾張家本を、わざわざ名古屋から運んでまで借りる必要があったのだろうか？

おそらくそこには、寛文四年に始まった幕府による歴史書『本朝通鑑』編纂事業が関係していたと思われる。寛文四年十一月、幕府は「二条殿日次記」を編纂担当者に貸し出すことを許可している(藤實久美子『近世書籍文化論』吉川弘文館、二〇〇六年)。光国が求めた公家日記は、幕府にとっても歴史編纂に必要な史料だったのである。

より広くとらえれば、儀式故実の先例書として秘伝されてきた公家日記が、歴史資料としての価値を見出されて書写されていく過程の一端を、ここに垣間見ることができるとはならないだろうか。

(名古屋城調査研究センター)

学芸員 木村慎平

蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫 〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地 TEL(052)935-2173 FAX(052)935-2174
ホームページ <http://housa.city.nagoya.jp/> <蔵書検索もできます。>

交通案内

■公共交通機関をご利用の場合

●名古屋駅より

【なごや観光ルートバス(メーグル)】名古屋駅前11番のりば名古屋駅発着で平日30分〜1時間に1本、土・日・休日は20分〜30分に1本運行、
④「徳川園・徳川美術館・蓬左文庫」下車徒歩1分

【市バス】名古屋駅前10番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

【名鉄バス】名鉄バスセンター3F 4番のりば基幹バス「三軒家」方面行「徳川園新出来」下車徒歩3分

【JR】JR中央本線、「大曽根」下車南出口より徒歩10分

【地下鉄】東山線「藤が丘」方面行、「栄」で名城線「右回り」に乗り換え「大曽根」下車③番出口より徒歩15分 桜通線「徳重」方面行、「車道」下車①番出口より徒歩15分

●栄より

【市バス】栄バスターミナル(オアシス21)3番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

■お車をご利用の場合

蓬左文庫専用駐車場はありません。徳川園駐車場(有料 30分120円)をご利用下さい。

ご利用案内

■休館日/月曜日(祝日・振替休日のときは直後の平日) ※催事により変更することがあります。

12月16日(月)〜1月3日(金)は特別整理・年末年始により休館します。

■展示室/有料 一般:1400円 高大生:700円 小中生:500円(蓬左文庫・徳川美術館 共通観覧)
令和元年6月8日(土)〜7月21日(日)の一般の入館料は1200円となります。

【開室時間】午前10時〜午後5時(入室は午後4時30分まで)

■閲覧室/無料 館外貸し出しはいたしません。

【閉架図書】午前9時30分〜午前12時 午後1時〜午後5時 【開架図書】午前9時30分〜午後5時

【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。電話・郵便による申込みも可。

